保育の實際

話させるまでのいとぐち

上澤謙二

ここに『銅像』と呼ばれる園兒があつた。毎日幼稚園の門をはいつてから出るまで、先生に對してけつして口をきかない。すべてのこと頭を縦にふるのと、横にふるので濟ましてしまう。いふまでもなく「縦」はイエスであり「横」はノーである。

保姆たちはこんな話をした。

『人間も、頭を縦と横にふるだけで、生活してゆけるものね』

『一言でも、あの子にしやべらせた先生はえらいわね』

『できないわよ。まるで銅像ですもの』

こういふ「銅像」が案外ある。恐らくどこの幼稚園にも幾人かあるのではなかろうか。

こういう子供を話すようにする——そのためにはどこでも苦勞する。

ところで、この子供は「話しきらい」というレッテルをつけられるのが普通であるが、實は彼は話はきらいでないのである。否、話したいのである。けれども話せないのである。話せないわけは、性格とか、習慣とか、環境とか、いろいろあるだろうが、兎に角話したいけれども話せないのである。もし彼が飽くまで話すことがきらいならば、話すことが始終繰返されている幼稚園には來ないだろう。もし彼の心を撮る寫眞があつたとしたら、人一倍話したい要求が燃え立つていることがわかるだろう。

さて、かういう子供を話させるにはどうすればよいか。指導の第一段は、かえつて彼から離れることである。幼いながら、彼は話せないといふ自分の短所をよく知つて、ひけ目を感じているのである。だからその短所に觸れられることは、病人が痛いところに觸れられるように、まことに辛いのである。もし先生がそれを氣にして、屢々何かいうとすれば、よし勵ましであれ、慰めであれ、當人に取つては深刻な經驗なので、遂には堪えられなくなるだろう。

例えば、朝、初めてその子供に逢つた時、先生が笑顔で迎

えて『おはよう』と、快活に挨拶する。先生からすれば、それによつてその子供に『おはよう』という機會を與え、少しでも話す方へ引張ろうとする親切な誘導であるが、それすら彼に取つては大難關にぶつかつたことになる。いかに努力しても、その時すぐに『おはよう』といゝ返すほどの口輕さにも、氣輕さにもなれないので、ただ困惑するだけであろう。二三回もそれをつづければ、朝な朝な先生を回避するようになるだろう。

こういうふうだから、組に分かれて出席を取る時返事をしないでも、さつさと次を呼ぶことにする。問答の順番になつても、どんどん通り過ぎて、次に移ることにする。その際その子供を、ちらりとも見ないようにする。見なくても、ドキドキする胸を抱いてうつむいて、身動きもせずにいることは分つているし、呼び返しや指名が頭上を通り越すと、ホツとすることも察せられる。兎に角「先生は自分が話さないことについては問題にしていない」という安心を與えることである。そうして、先生と同じ机に向き合つても、おちついていられるようにすることである。

こういう時期がしばらくつづいて、安心が根をおろしたとたしかめられたら、第二段に進む。しかし第二段では、口を開くことは尙早で、目だけ働かせる。時にやわらかい顏をして、子供の方をちよつと見る。これは偵察と接觸の意味が半ばしている。偵察とは先生にどのくらい親しんできたか、或はまだかを窺うこと、接觸とは相親しむ前提として、目と目だけでも觸れ合わせることである。だから時々である。頻繁では强過ぎる。それからやわらかい顏である。ピンと張つたまじめな顏や、こぼれるような笑ひ顏は、いずれも强過ぎる。それから「ちよつと」である。注目や凝視は强過ぎる。

ところで視線をむける途端に、相手が顏を伏せるようだつたら末だしで、第一段の範圍に止まらねばならぬ。けれども「時々」でも「ちよつと」でも、目を見合はせたら、何かを讀み取れないことはあるまい。「目は心の窓なり」ともいわれる。そこに明るい閃めきの氣分、晴々しい輝きのうごきを見たら、有望である。然しこれも時々でなければならない。頻繁では、子供は應接するのに煩わしくものうくなつて、折角擧げた顏を伏せるようになる危險なしといえないからである。

だんだん目と目の交渉が適當に行われて、明るい晴々しい閃めきと輝きが眼中にあふれるようになつたら、第三段に進む時期となる。いよいよ言葉の交換である。けれども他の子供と同じように、改めて質問したり、開き直つて話しかけたり、大勢の前で指名したりするのは早過ぎる。そんなことをしたら、その勢いに壓倒されて、發しようとした聲も發しなくなり、出ようとした言葉も出なくなるだろう。目出たない自然の機會を捉えて、話を引出すことが肝腎である。

それにはお辨當の時などが最もふさわしいだろう。先生は豫めその子供をすぐそばに座らせることを忘れない。たべながらあちこちで話がはじまるが、それは最も自然で、自由

で、具體的である。自然とは、たべるということが主なので、われ知らず始まるから。自由とは何の制限も屈託もなく話せるから。具體的とは、目の前に置かれてあるお辨當そのものについての話が多いから。だから亦最も氣易い時、話しよい時なのである。

先生はそばの一人二人と所謂「具體的」なお話を、しずかにゆつくりはじめる。その子供と親しむためでもあるが、あの子供と話す伏線でもある。その子供たちとの話の間に機會を見て「あの子供」に話しかける。その時の言葉は短かい方が、聲は低い方がよい。

『お辨當おいしい?』又は『お母さんが作つてくださつたの?』

こんな質問は拙劣である。これに對する答は言葉を要せない、頭の縱ふりか横ふりかで濟まされるからである。

『お辨當のお菜何?』又は『誰が作つてくださつたの?』

こんな質問は圖星である。どうしても言葉で答えなければならないからである。しかも分かりきつたやさしいことで、簡單な言葉で濟むことだからである。多少でも面倒なむづかしいこと、比較的長い言葉を要することは避けねばならぬ。答えるのに臆劫になつて、口をつぐませてしまうからである。

偶然の接觸を利用することも忘れてはならない。不意に廊下などで出遇つた時『どこへゆくの?』『何しにゆくの?』などと、聲をかける。場合が自然で豫期しなかつただけに、かえつてひよつこり返事が出るものだ。

『お部屋へ』『お辨當取りに』などと。

周圍の事情によつて或る必要に迫られた場合は、好箇の機會として見逃がしてはならない。例えば下駄が見つからなくてうろうろしている。「何か問題が起つた」と見て取つた先生は、透かさずそばへ寄つて聞く。

『どうしたの?』

現在困つてゐるので援助を求めねばならぬ。痛切な必要に迫られると、言葉はすらりと出てくる。

『下駄が……なくなつたの……』

『そう——どこへぬいでおいたの』

『ここへ……ぬいでおいたの……』

『どんな鼻緒? 黑いの、白いの?

『黑いの……』

『ぢやあ、先生といつしよに見つけませう』

手を出すと、多分その手を握つて曳かれるだろう。普通ならば絕對にそんなことはない。手など出したら逃げてゆくだろう。けれども今は賴らなければならない、いつしよに歩かなければならない。おのずとつながるわけである。そうやつて探す間も、先生が必要に應じて話しかければ、たいがい答えるだろう。但し例によつて「頻繁」にならぬように。

この際、先生は一生懸命になつて、どうにかして下駄を探し出してやらねばならない。それは子供の不便不都合を滿たすと共に、所有を舊に歸す意味からも必要なことというまで

もないが、同時にその子供の談話生活の上からも、極めて重要なことだからである。というのは、ここで下駄が見つかれば、それは先生の援助のおかげであるが、先生の援助を得られたのは、實に口を開いて話したことのおかげだからである。ここに於てか「話す」ということが、いかによいことで有益であるかを、覿面に感ぜざるを得ないだろう。そうしてこれこそ經驗を通じて談話の價値を體認させることに外ならないであろう。

『よく先生にいつたわね。先生にいつたから見つかつたのよ、よかつたわね』

先生は共に喜ぶ心から、このくらいの數語を添えて、その經驗を更に明かに意識させ、その事件のしめくくりとするのもよかろう。

かくて「銅像」の口は漸くにして開き、舌は漸くにしてうごき出すようになるだろう。即ち談話の森へのこみちが漸くにしてつけられたことになるであろう。

ここでも保育は、愛と、注意と、機智と、根氣の綜合である。

× × × ×

○親と先生の會話

『いつも御厄介さまでございます』
『どういたしまして、ゆき屆きませんことばかりで』
『おかげで、健康も大層よくなりまして』
『そうですね。お顏色も……』
『まつくろになりました』
『この頃は、特別毎日外あそびで』
『先生も……おつかれでしょう』
『すつかり日にやけました。ホホ、、』
『よく遊ばせていたゞくので、おなかもよくすくとみえて、ご飯もよくいたゞきます』
『わたくしも、ホ、』
『夜分もよくやすみまして』
『わたくしも、よくやすみます。夜になるとこくり〳〵で』
『ほんとに、ご苦勞さまでございますね。子どもは幼稚園を、何より樂しみにしていますが』
『わたくしも。お子さん方に負けない程、幼稚園が何より樂しみで……』
『ありがとうございます』
『いゝえ、わたくしこそ、ありがとうございます』

六　月

倉橋惣三　作詞
弘田龍太郎　作曲

♩=96

アかウ　オるタ　イいエ　ノきウ　ハもタ　ラのエ　アかア　オるオ　イいイ　ハぼロ　クヤうガ　シしツ

アかオ　オるド　イいレ　ヤくオ　ーード　マつレ　ロろカ　くがーク　ツつル　ワわイ　アかロ　クオるガ　イいツ